

目次

0 科目説明	6 学歴社会
1 学校教育の病理	6-1 身分社会・能力社会との比較
1-1 3つの説	6-2 対策
1-2 歴史	7 企業と学歴
1-3 学校教育の構造	7-1 企業にとっての大学の意義
2 校内暴力	7-2 日本企業のあり方
2-1 現象	7-3 日本企業と欧米企業の比較
2-2 原因と対策	8 世界の教育制度
3 体罰・管理教育	8-1 イギリス
3-1 生徒管理	8-2 ドイツ
3-2 体罰の禁止論と許容論	8-3 フランス
4 いじめ	8-4 英独仏と日米の教育制度の比較
4-1 統計	9 大学入試
4-2 経過	9-1 歴史
4-3 原因	9-2 共通一次試験の目的
4-4 対策	9-3 共通一次試験の結果
5 不登校	
5-1 類型	
5-2 経過	
5-3 原因	
5-4 対策	

大まかに、2つの分野に区分できる。気がします。

前半(1~5):学校教育の病理に関して(1が概論、2~5が各論)

後半(6~9):学歴に関して(6は社会からの視点、7は企業からの視点、8は世界との比較、9はその結果)

- ・ このシケプリは、ネット上に出回っているものの中から、よさそうなやつをまとめて見やすくしたものです。足りない部分は、適宜補いました。
- ・ 章立ては便宜的のものなので、必ずしも板書とは一致しません。
- ・ 大事な語句は**太字**にしています。
- ・ 脚注はあまり重要じゃないので、読まなくてもいいです。板書の補足、授業中に先生が言ったことのメモ程度に考えてください。
- ・ 最後に、遅くなってごめんなさい。

0 科目説明

<教育の観点と領域による分類>

領域 観点	家庭・幼時教育	学校教育		社会・成人教育
			大学教育	
制度・思想	母子関係・幼稚園	学校制度・思想	大学改革	生涯教育論
方法	しつけ、おふくろの味 ¹	教育方法論	大学教授方法	成人教育、企業内教育
心理	幼児心理学	学習心理学・スクール カウンセラー	キャンパス・カウンセ リング	生涯発達の心理
評価	発達や知能の評価	学力評価	大学入試	職業適性の評価
病理	母子分離、早期教育	いじめ、非行、不登校	入試の過競争	学歴主義

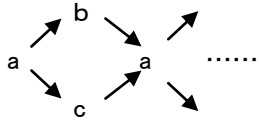
¹ 親が子にする“しつけ”は、過剰になりすぎて“おしつけ”になりつつある。一方で、母親は料理に手をかけなくなって、袋から出してレンジで温めるだけのレトルト食品がよく用いられていて、“おふくろの味”がいわば“ふくろの味”になってしまっている。“おふくろの味”から取れた“お”の字が“しつけ”にくっついて、“おしつけ”になっている。要するに、くだらないダジャレ。

1 学校教育の病理

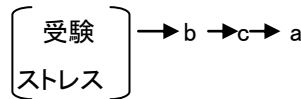
1-1 3つの説

a: 校則強化 b: いじめ c: 対教師暴力 ⇒ これら3つの病理の関係は？

① 悪循環説

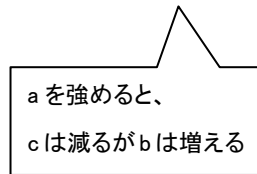


② エスカレート説



③ 板ばさみ説

非行 → c → a → b



歴史的には③板ばさみ説と同じ経緯をたどっている。

1-2 歴史

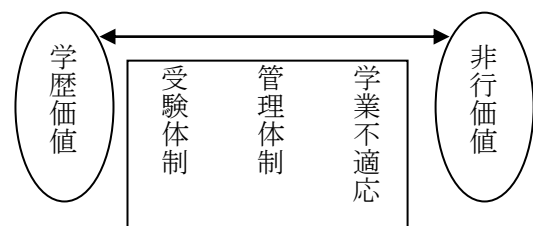
1960年代中	非行の第2ピーク	
後	大学紛争	東大安田講堂事件(1969)
1970年代前	シラケ・内ゲバ ² ・暴走族	浅間山荘事件(1972)
中	乱塾・落ちこぼれ(七・五・三 ³)	
後	ヤンキー・家庭内暴力	金属バット事件(1980)
1980年代前	非行の第3のピーク・対教師暴力	
中	いじめ・子どもの自殺・偏差値体制	
後	管理過剰・登校拒否	
1990年代前	先輩後輩関係・オカルトブーム	
中	カルト宗教・いじめの第2ピーク	地下鉄サリン事件(1995)
後	性非行・校内暴力・学級崩壊	
2000年代前	キレる・児童虐待・スクールカウンセラー	
中	ゆとり教育・学力低下・NEET・引きこもり	
後	格差社会	

1-3 学校教育の構造

70年代: 受験体制にまつわる問題(乱塾・勉強についていけないことに起因する家庭内暴力)と学業不適応にまつわる問題(落ちこぼれ・非行・校内暴力)が生じる。

80~90年代: その反動として管理体制が強化され、管理体制にまつわる問題(管理過剰・いじめ・不登校)が生じる。

00年代: その反動として管理の緩和(ゆとり教育)が進んだが、その結果、今度は学力低下が問題となる。



学歴価値: 学校は学力をつけるための場で、よい学校を出ることで学歴を得たいという価値観

非行価値: 学校にしばられることを拒み非行に走る価値観

学歴価値の方に傾きすぎると、受験体制にまつわる何らかの問題が生じて反動が起こり、非行価値の方に傾きすぎても、学業不適応にまつわる問題が生じ、反動が起こる。そしてその二つの中間に管理体制が存在する。受験体制と学業不適応、そして管理体制の三極に分解している学校に対して、社会の要求は学歴価値と非行価値の2つの価値の間をゆれ動いている。

² ゲバとはドイツ語で“暴力”を意味する“ゲバルト”の意。銭ゲバのゲバと同じ。

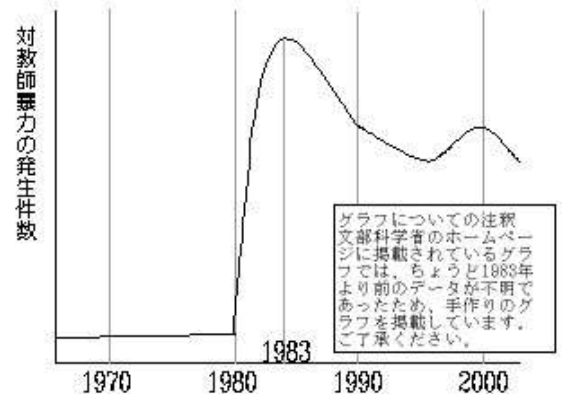
³ 高校で7割、中学校で5割、小学校で3割が落ちこぼれに該当したことから。

2 校内暴力

2-1 現象

A: 器物破損 → B: 生徒間暴力 → C: 対教師暴力 (→D: 体罰)

※ 対教師暴力⁴は、1983年にピークを迎える。(右図を参照)



A: 器物破損 (School Vandalism⁵)

- 1: 放置 (掃除をしない、ごみのポイ捨て)
- 2: 破損 (ロッカーや掃除用具、トイレなど軽微なもの)
- 3: 落書き (スプレー缶で「〇〇死ね」、ガムをくっつける)
- 4: 破壊 (ガラスや火災報知機へのイタズラ、放火)

B: 生徒間暴力

- 1: 校外非行集団との接触 (ゲーセンなどで)
- 2: 金品の強奪 (カンパ・パーティー券を通じて)
- 3: 校外非行集団の校内侵入 (学校行事や近くの公園での集会を通じて)
- 4: 抗争
- 5: 生徒集団への浸透→校内非行集団の結成(抗争に対する自衛の意味も含む)

(以下80年代から多く見られた現象)

- 6: 正常な集団への攻撃・中傷 (「クラスのリーダー=ぶりっ子」、「正義は格好悪い」)
- 7: 弱い者いじめ・スケープゴート (暴力の誇示)
- 8: 傍観者(中間層)の迎合 (一般生徒が不良に感化される)
- 9: 玉突現象⁶ (いじめの被害者が非行をやらされ、加害者化する現象)
- 10: 二次的非行 (自宅からの金品の強奪⁷等)
- 11: 脱落防止策 (服装・髪型を非行顕示スタイルにして周囲へのラベリングを行い、非行集団から外れられないようにする。脱落・密告(チクリ)をしたものはリンチ。)

C: 対教師暴力⁸

- 1: 規則の段階的違反 (教師の様子を見ながら徐々に過激化)
- 2: 違反の合理化・公然化(教師間の態度の違いを「差別だ」と主張した。)

(以下80年代から多く見られた現象)

- 3: 授業妨害
- 4: 衝動的対教師暴力 (教師の注意に逆上して)
- 5: 計画的挑発
- 6: 計画的対教師暴力 (先生を軟禁状態にしたりもする) ←警察の介入
- 7: 組織的な学校のつとり ←メディアの報道

※ 70年代と80年代で、現象が大きく異なることに注意。

⁴ ほとんどは(公立の)中学校で発生している。高校で少ない理由は、義務教育でなく退学の恐れがあるから。

⁵ Vandalism: 芸術や文化を破壊する行為のこと。ヴァンダル族の蛮行に由来。

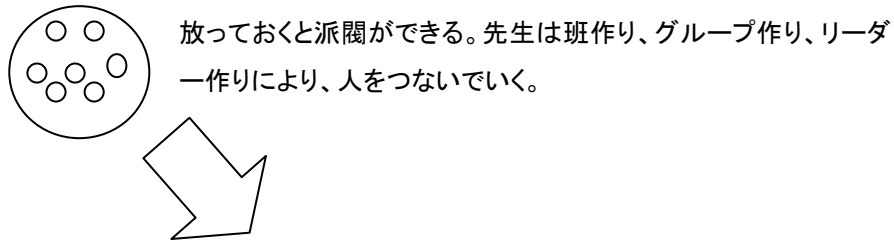
⁶ 一般に生徒全体の5%が非行グループになると、学級内の構造が変化し、教師の手に負えなくなる。

⁷ 金品の流れは、弱者→非行集団→暴走族→暴力団が多かった。 ⇒2-2①も参照

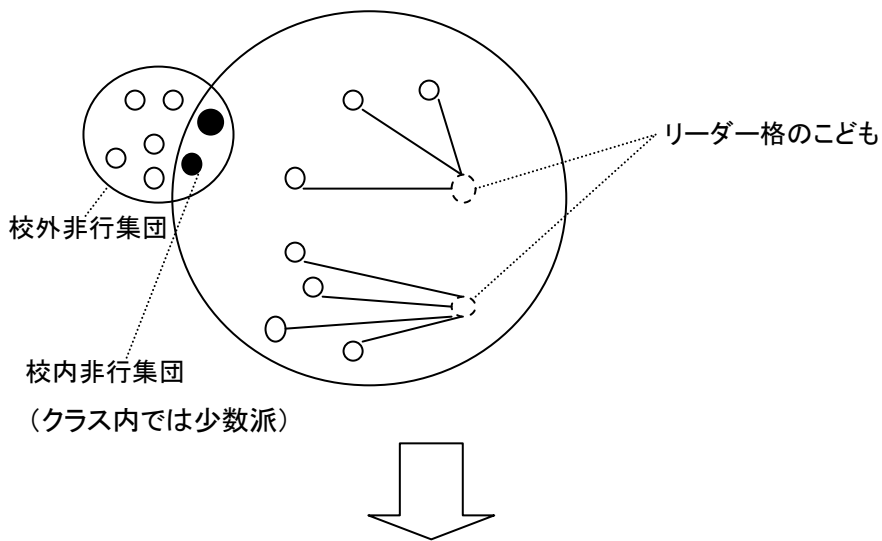
⁸ 対教師暴力の成功→非行集団内での地位向上→対教師暴力の計画→…という図式になっていた。

<クラス内の構造の変化過程>

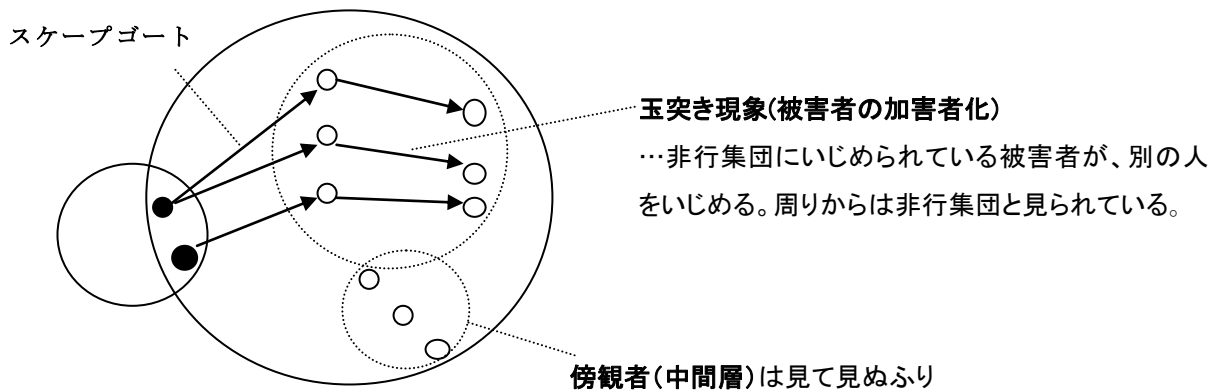
①初期状態



②校内非行集団の結成(Bの5) 主に70年代まで



③正常な集団への攻撃・中傷～玉突き現象の発生(Bの6～Bの9) 主に80年代以降



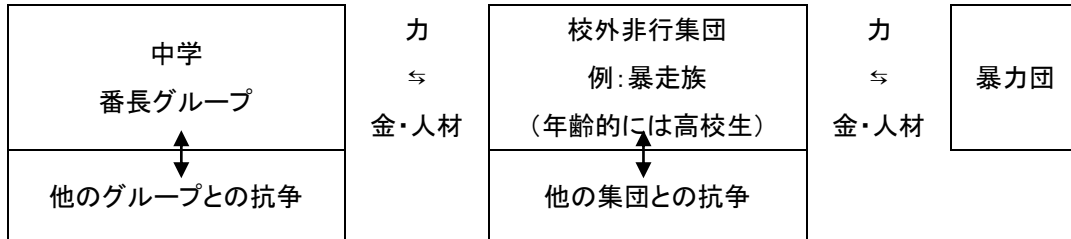
2-2 原因と対策

誘引:車で言うアクセル

抑止力:車でいうブレーキ

	誘因の増加	抑止力の低下
外的	①	③
内的	②	④

① 外的誘因の増加



【対策】

- 1、校外非行集団との接触を断つ ex)PTA活動・オートバイの3ない運動((免許を)取らない・買わない・乗らない)
- 2、番長集団の解体 ex)退学制度
- 3、跡目引継ぎ防止 ex)学年隔離 ⇄ いじめ防止対策には学年融合 ⇒4-4②のbも参照

② 内的誘因の増加

→原因は様々な欲求不満。これが暴力につながる。

	原因	対策
1	学業不振 ⁹ →教師への恨み	「分かる授業」→ ゆとり教育
2	自己評価の低さ・否定的自己像	肯定的自己像の形成・長所に注目した教育
3	将来への展望の喪失 (「今が楽しければいい」・「若いうちに太く濃く生きる」)	進路指導・教育カウンセリング

③ 外的抑止力の低下

→学校の間接的抑止力¹⁰や家庭のしつけがうまく機能しなくなっている。多くの家庭は「放任」という方針を採り¹¹、しつけをしていない。

【対策】

- 1、非行の手口や対応の研究 → マニュアル作り・役割分担
- 2、毅然とした態度 (教師の団結・体罰は逆効果! ⇒下図・1-1③板ばさみ説も参照)
- 3、家庭との連携
- 4、早期発見・早期指導¹²

対教師暴力→管理教育(→体罰)→いじめ・弱い教師への反抗

⁹ 非行少年の 78%が成績下位、21%が中位、1%が上位。ほとんどは能力がないのではなく意欲に乏しい。ただし、「まじめ」に暮らしてきた生徒が非行に走ることもあり、学力コンプレックスが原因とは言えない、という主張もある。

¹⁰ これに対し、警察は直接的抑止力を持つといわれる。

¹¹ あるデータでは、家庭方針は、放任 69% 溺愛 7% 過干渉 4%であった。

¹² 管理教育につながる危険性もある。

④ 内的抑止力(規範意識)の低下

【原因】

- a, 自己中心性 (相手の痛みが分からない・責任転嫁)
- b, 自己顕示性 (目立ちたがり・メディア好き)

【対策】

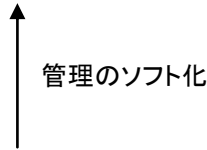
- 1、個別指導 (生徒がほかの生徒を意識しないように。生徒は1人にすると意外とおとなしい。)
- 2、暴力否定宣言
- 3、民主的集団作り → 生徒会活動の活性化
- 4、部活動の活性化¹³

¹³ しごき、いじめに発展する危険性もある。

3 体罰・管理教育

3-1 生徒管理

- ①罰則強化—体罰による制裁
- ②点検強化—持ち物検査の実施
- ③制定強化—校則の強化・規定の詳細化



3-2 体罰の禁止論と許容論

	禁止論	許容論
形式的・古典的	①	②
実質的・現場的	④	③

① 形式的禁止論

- a、**学校教育法11条**で禁止されている。
- b、生徒の人権の侵害
- c、単なる暴行

② 形式的許容論

- a、**愛のムチ論** ex)『スキンシップ判決』（体罰をスキンシップの範疇とみなし、教師を無罪とした判例。）
- b、**限定容認国の存在**

→アメリカ・イギリスなどのキリスト系の古い学校では **in loco parentis** (親の権利の代行) である (親の体罰はしつけのためにはやむを得ない) として、教師の体罰が認められている。ただし、制約¹⁴がある。

- c、**しつけ委任論** (日本でも教師は親¹⁵からしつけを委任されているとする考え。)

③ 実質的許容論

・非行対策

→対教師暴力に対する正当防衛、生徒間暴力やいじめを止めるため、規則違反への対応、授業不成立状況 (授業崩壊)、授業三悪 (遅刻・私語・忘れ物) への対応に体罰が認められるとする考え。¹⁶

④ 実質的禁止論

→対教師暴力などの非行に対して体罰をもって対応したところ、弱い教師への反抗や、いじめの発生・いじめのエスカレートが見られた (⇒1-1③板ばさみ説も参照) ため、体罰以外での対応が考えられるようになった。

- a、倫理的要求 **毅然とした態度**¹⁷ (≠体罰・放任)
- b、わかる授業 学級通信¹⁸ PTAとの交流

¹⁴ 以下の6つの条件に従う必要がある。(1)理由が明確であること。(2)体罰の方法はあらかじめ決められている。(3)体罰する部位も決められている。(4)体罰ができるのは校長が認めた者のみ。(5)体罰をする時には第三者の立会いが必要。(6)体罰の記録をつけること。

¹⁵ 体罰に対する許容度は、生徒<教師<親 だとされる。生徒涙目w

¹⁶ NHKの調査では、教師の62%が体罰をしたことがあると答えている。

¹⁷ 『ブリキの勲章』で、能重真作が唱えた。

¹⁸ 『非体罰宣言』で、池上正道は荒れていた担当クラスを1年間体罰無しで指導。学級通信を頻繁に作成した。

4 いじめ

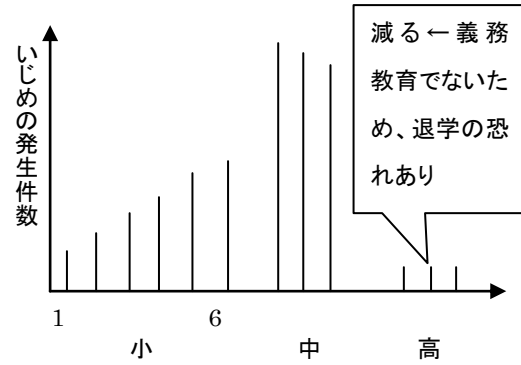
4-1 統計¹⁹

＜中学校におけるいじめの件数＞

警察が認知したいじめ(補導事件)	0.04%
学校が認知したいじめ	1%
親が認知したいじめ	15%
生徒が認知したいじめ	40%
軽微ないじめ	70~80%

＜いじめの被害・加害経験の有無＞

ある程度、いじめの一般化が認められる。



	加害経験なし	加害経験あり
被害経験なし	23%	19%
被害経験あり	19%	38%

4-2 経過

① 鞭当ての段階

不特定多数が無差別なからかい合いを行う。(ターゲットを絞り込む)

→ からかいの対象が反応の面白い子(泣く子や逆らわない子)などに集中していく。まだ悪意はない。

② 流動性の段階

いじめの加害者側と被害者側の立場が常に入れ替わっている。

→ 生徒達は被害者になるかもしれないという恐怖感を抱き、被害者になることを避けるため、いじめに加わったり、傍観者に徹するようになる。(特定の個人の意思ではなく、**集団の力学**が働く)悪意が高まる。

③ 固定化の段階

その結果、少数の子が決まっていじめられるようになり、以下のような構造が確立する。

(森田洋司作成のモデル)

加害者	被害・加害者	被害者	仲裁者
	観衆	傍観者	

観衆: 自ら直接手を下さないが、加害者を煽る。

傍観者: 見て見ぬふりをする。

＜小学校と比較した中学校のいじめの特徴＞

- ・ 被害者の減少(特定の子に固定化)
- ・ 観衆・傍観者の増加
- ・ 手口の残酷化・長期化

	小学	中学
加害者	19%	20%
被害・加害者	20%	8%
被害者	16%	9%
仲裁者	7%	4%
傍観者	33%	44%
観衆	6%	16%

※被害者のレッテルの拡大: 1980年代以降、弱いものに限らず、真面目な子・密告者・成績上位者²⁰・先生に褒められている子・先生に従順な子・個性的な子もいじめの対象に。

※**集団の画一化**: 周囲から浮いている子・目立つ者(帰国子女・転校生²¹など)がいじめられる。

→ 目立ちたくない心理が働く。

¹⁹ いじめの発生件数は、校内暴力同様、中学校が圧倒的に多い。

²⁰ ある調査では、いじめの対象は成績上位が 22%、中位が 32%、下位が 46%であった。

²¹ 転校生の中には、いじめを苦にして転校したのに、転校先でもいじめに逢うと悲惨なケースが少なからずある。なお、英米ではいじめの加害者が学校から「追放」されるように転校するケースの方が圧倒的に多い。

④ 手口の陰質化の段階

いじめの言い訳作りが巧妙化・正当化しようとする・いじめの粗暴化・ボスの指示に基づくいじめ(体系化)

⑤ 非行化の段階

性犯罪や自殺に発展するケースも

	外的	内的
誘因の増大	①	②
抑止力の低下	③	④

4-3 原因

① 外的誘因の増大

・ 非行集団の弱い者いじめ

→いじめ対策として先生はまとまったクラス作りのためにリーダー格を育てようとする。しかし、非行集団はまず弱い者をいじめて自分の側に取り込み(被害加害者化)、リーダー格の人についている人を減らしていく。そのうち、リーダー格の人自体を攻撃するようになり、そうすると、リーダー側についていた残りの人も自身へのいじめを恐れて、リーダーへの攻撃を見てもみぬふりするようになる(観衆・傍観者化)。こうしてリーダー格の人の孤立化が進んでいく。

⇒2-2B 生徒間暴力も参照

② 内的誘因の増大

・ 校内暴力 → 学校側が生徒管理を強化 → 生徒の欲求不満 → いじめの拡散

⇒1-1③板ばさみ説も参照

③ 外的抑止力の低下

a.教師からの不可視性

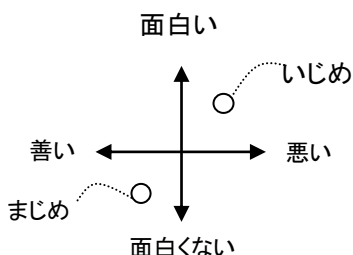
- (1)手口の擬装化
- (2)動機不明
- (3)被害者と加害者が流動的
- (4)被害者が仕返しを恐れ教師にいじめの存在を言わない
- (5)教師の多忙化

b.集団の圧力 → 仲裁者(リーダー格)が出にくい

- ※ 同調の心理 (アッシュの実験・・・周りの人が間違った答えを出すと、自分もそれにつられてしまう)
- ※ 服従の心理 (ミルグラムの権威服従行動実験・・・閉鎖的な環境下では、権威者の指示に従いやすい。)

④ 内的抑止力の低下

a.学校で社会的な面からの教育がされず、個人的な面ばかりが強くなっている。何のために勉強をしているかわからない。



b.面白さ中心の価値判断

←テレビの二面性

バラエティー:いじめを助長²²

報道番組:いじめの原因として、学校や教師 etc を糾弾

²² 1980年代半ば以降のお笑いブームの影響も大きい(?) まあ、あると思います。

4-4 対策

① いじめの発見

ソシオメトリックテスト…クラス構造の把握(集団の対立・孤立した人の有無を調べる)

※ このテストにはプライバシーの問題あり。

② いじめの予防

a、**Lewin の実験**…11 歳のアメリカ人の少年少女に5人ずつ1グループになってもらい、**専制型リーダー**のいるグループと**民主型リーダー**のいるグループをつくる。それぞれのグループに大学生をリーダーとしてみんなでクラブ活動を行わせ、その仕事の経過および結果を比べる。

	専制型リーダー	民主型リーダー
【特徴】		
方針	リーダーが決める	集団の討議 ²³ で決める
分担	リーダーが決める	集団の合議 ²⁴ で決める
見通し	リーダー以外は持っていない	全員が持っている
批評	個人的批評	客観的批評
【結果】		
仕事量	同程度	
仕事の質	受動的	積極的
雰囲気	弱い者いじめが発生	友好的

専制型リーダーの下では、リーダーに対して不満が多い。リーダーがいなくなると仕事の能率が低下。欲求不足から、弱い者いじめが生じやすい。

→いじめの予防には民主的リーダーの育成が効果的。

b、**異年齢集団(きょうだい)づくり** …小学校では、昔の地域集団にならって1～6年の縦割りの集団を作り、年長者(強者)が年少者(弱者)をまとめ、いじめをなくす。

cf. **同年齢集団づくり**: 中学では非行集団の跡目引継ぎ防止のための学年隔離策 → 2-2①参照

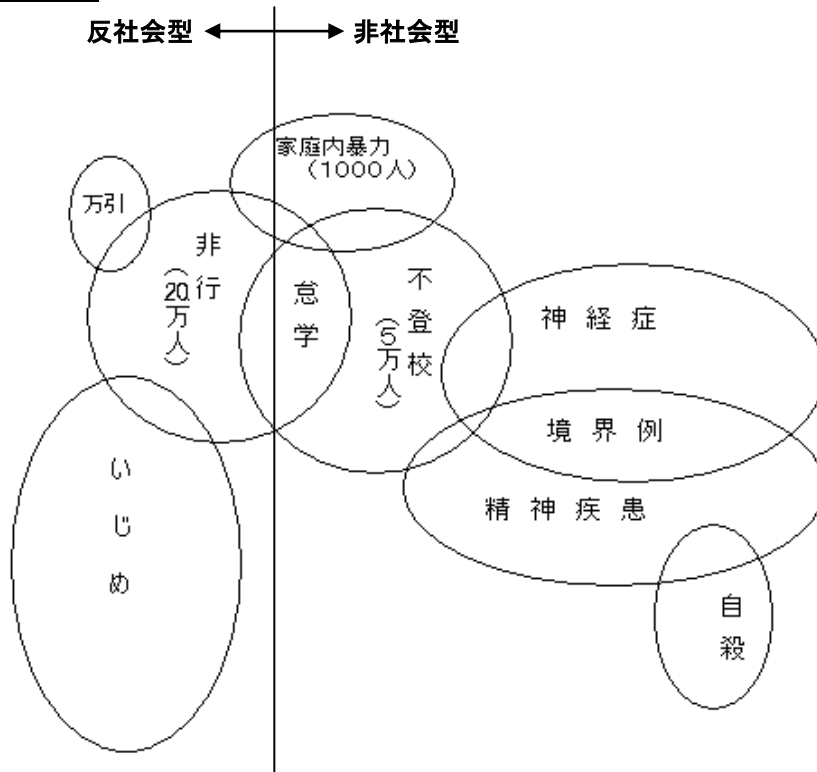
③ いじめへの介入

・ **ロールプレイ(心理劇)**…『仲間はずれ』をテーマとしたシナリオを作り、生徒に実演してもらい、全員にいじめられる役を演じてもらい、いじめのひどさを体験してもらい、また、いじめの仲裁の体験もしてもらう。

²³ 討議: ある問題について互いに意見を述べ、論じ合うこと。

²⁴ 合議: 関係者が集まって相談すること。

5 不登校

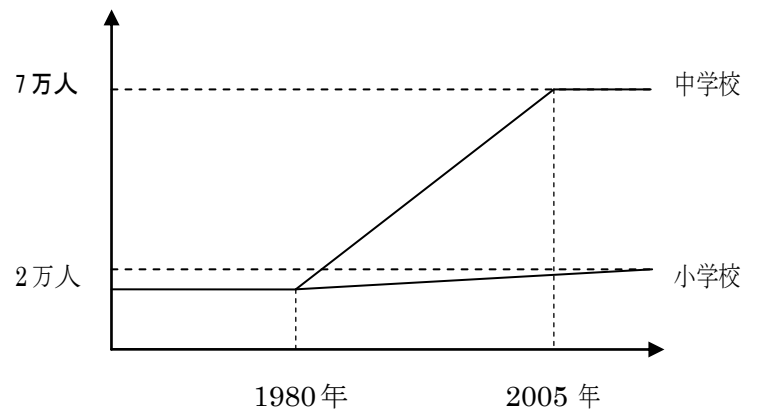


5-1 類型

長期欠席(年 50 日以上欠席、2003～は年 30 日以上欠席)

- ① 経済的理由(不就学²⁵) 500 人
- ② 身体的理由(病気・怪我) 1 万 3000 人
- ③ 心理的理由(学校嫌い) 中学5万人 小学1万 2000 人 高校はそんなにいない 中学も小学も増加傾向
…**広義の不登校**(昔は**登校拒否**といった)

- (1) 精神的疾患(うつ病、統合失調症)
- (2) 怠学(非行型)
- (3) 神経症型(学校恐怖症)…**狭義の不登校**
 - ・急性型…急に行かなくなる
 - ・慢性型…時々行かない



5-2 経過

神経症型

- ① 心氣的時期(身体状況を訴える。重症でないのに重症と思ひ込む。)
- ② 暴力・合理化の時期(「勉強意味無い」など) →家庭内暴力に発展することも
葛藤の発生…**登校強迫**(「学校に行かなきゃ!」) ⇄ **登校不安**(「行ったらいじめられる」)
- ③ 怠惰・内閉期(暴力は減少。引きこもり。特に親との関係を絶つ。) →NEET
- ④ 回復期(生活習慣が正常に。外出するようになる)
- ⑤ 登校開始

²⁵ 宗教的な理由から、親が子を学校行かせない場合もこれに含まれる。

5-3 原因

①家庭因

親の養育が過保護→母親からの分離不安説

②性格因(本人因)

自己脅威像説(イイ子でいたい⇔競争に敗北するかも)

③学校因…これが最も妥当か。(①・②なら年度による変化はないはず)

a.不登校児のアンケート

- 学校に行きたくない理由 1位 子供同士の関係(うまく馴染めない)
- 2位 学校の雰囲気(小派閥化している)
- 3位 いじめ

b.森田調査(教育社会学)

全国の中学生500万人のうち、

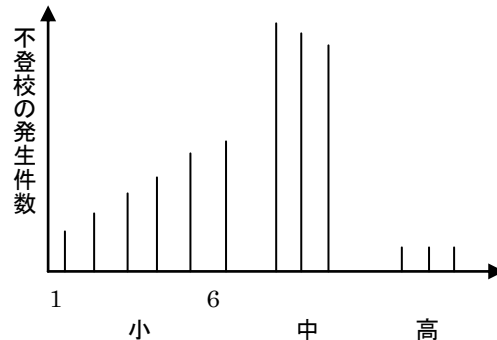
公式発表	1%(5万人)
不登校(1~29日)経験あり	17%
遅刻	25%
登校拒否感情あり	67%

→登校拒否感情なしが3分の1を占める。統計的には登校拒否感情がないほうが異常。

不登校はどの子にも起こりうる。

c.統計

校内暴力・いじめ同様、中学校で最も多い。

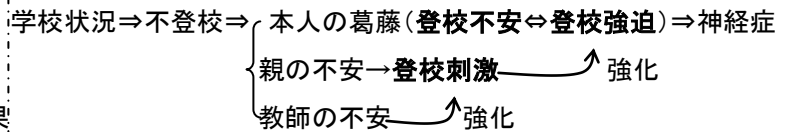


<不登校の原因と結果の関係>

1次原因⇒1次結果

2次原因⇒2次結果

3次原因⇒3次結果



5-4 対策

a.1次結果発生以前→学校状況の改善 ex)いじめ対策

b.2次結果発生以前→登校刺激をなくす(「行かせる」のではなく、逆に「行かせない」ような指導)

c.3次結果発生以降→葛藤の解消 ex)カウンセリング

不登校児のための場の提供 ex)不登校児限定のクラス・夜間中学校・私塾

要するに、管理と自由のバランスが重要。

6 学歴社会

学歴社会→入試過競争→教育病理(非行・いじめ・不登校)

この図式は本当か？

結論から言うと、学歴社会→入試過競争はホント

入試過競争→教育病理はアヤシイ ⇒1-1③も参照

6-1 身分社会・能力社会との比較

学歴社会を何と比較するかで学歴に対する見かたは変わる。

①身分社会と比べる→学歴効用論

②能力社会と比べる→学歴無用論

①学歴効用論	②学歴無用論
<p>a,社会流動性を高める</p> <p>身分社会に比べれば機会均等である。</p> <p>ex)明治の立身出世主義</p>	<p>a,身分社会の偽装</p> <p><学生の親の平均年収></p> <p>国立大=100 とすると、</p> <p>私大=138</p> <p>東大=152</p> <p>京大=123</p> <p>名大=84</p> <p>→結局所得が高くなければ高学歴など無理。</p> <p>見た目が変わっただけの身分社会。</p>
<p>b,学歴=能力の証明</p> <p>産業化が進んでいる国</p> <p>:父親の職に関らず子供が高学歴をおさめている。</p> <p>発展途上国</p> <p>:親の職業が子供の学歴を規定しやすい。</p>	<p>b,学歴の名目化・空洞化</p> <p>「貴族主義(aristocracy)でなく学歴主義(degreeocracy)」²⁶</p> <p>学歴=入試歴=学校歴≠学習歴</p> <p>大学に入っただけで、あとは遊びほうける人もいる</p> <p>→出身大学から入社時の正確な学力は測れない。</p>

6-2 対策

1学歴の取り直しを可能にする

2学習歴の重視

・リカレント教育: 大学を卒業し社会に出た後も大学に復帰できるようにし、社会と大学を行き来できるようにする。

北欧で盛ん。

・生涯教育 ex)放送大学・大学院の社会人枠・教員の免許更新制度

²⁶ 1970年の OECD の報告書による。Degreeocracy は造語。「日本の社会は大学という社会的評価による厳しいランク付けが行われる」「18歳のある一日(=入試日)で残りの人生が決まる」「雇用主は、能力ではなく卒業した大学の学部で判断する」などと言われた。

7 企業と学歴

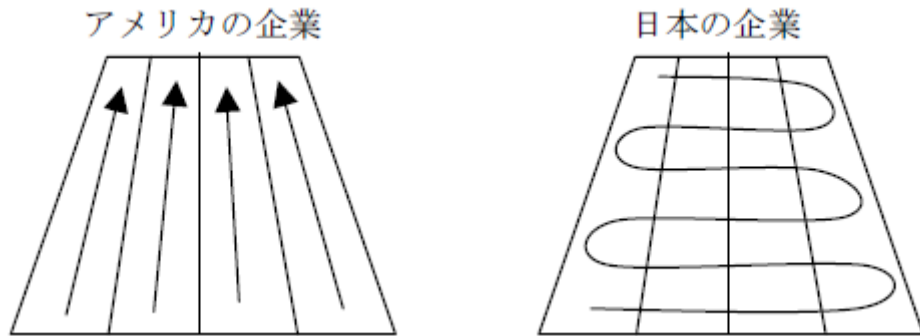
7-1 企業にとっての大学の意義

- a.職業養成機関…医学部や法学部の一部。ただし、文系全体ではほとんど行われていない。
 b.学力選抜機関…大学は学力(偏差値)による選抜を行えさえすればよく²⁷、大学卒業後、**企業内教育(On the Job Training)**で専門的な職業訓練行う。

現状では、aよりもbが重視されており、このような企業の状況は**入試タダ乗り論**とよばれる。
 (企業が選抜を行うには時間・費用がかかりすぎるので、大学入試および予備校の偏差値ランクを利用)
 しかし
 それならば、入学後すぐ入社すればいいはず！(選抜はすでに終わっているのだから)
 そうなっていないのはなぜか？と考えると、、、

- c.人間養成機関…能力ではなく**人格形成**をしてもらう。ヴァイタリティ・責任感・協調性・魅力のある人材を求める。
 ウィスキー樽のメタファー:品質区分(入試)→熟成(大学)→出荷(入社)
 d.補足 文系の学生が大学院に行くのは就職に不利とされている。これが、文系の学生の博士課程進学率を低下させる要因となっている。なお、USAでは逆の傾向が見られる。

7-2 日本企業のあり方



	欧米企業	日本企業
人事構成	職務別	ジェネラルローテーション(企業内転職)
昇進	能力主義	(能力+)年功
労働組合	職務別	会社別
競争	はげしい	おだやか
転職	欠員がでたら容易に	あまりない(欠員は新入社員で補充)
入社の意味	就職	就社

欧米では、入社後から職種が変わることがない。その分野のエキスパートになる。誰かが退職したら、ほかの会社から同じ職に就いていた有能な人材をヘッドハンティングしてくる。

日本では、欠員の発生に際し、下級社員を昇格させたりするのではなく、別の部署の同レベルのポストから人を(例えば営業課課長クラスの人物の欠員が生じたら、宣伝課の課長を)横滑りさせて後任に充てるやり方がとられる。

- ・ 日本型企业の問題点…リストラ後の復帰が困難
- ・ 対策…派遣社員の導入

²⁷ その結果、大学の教育内容自体が疎かにされ、大学のレジャー化が進んだと言われる。

7-3 日本企業と欧米企業の比較

	欧米企業	日本企業
要求される能力	入社後すぐ使える実力 Specialist 個性重視	素質・一般的能力 Generalist 協調性重視
教員社会	Specialist の集団	Generalist のローテーション
能力評価	多元型→多様な職業適性テスト	一元型≡偏差値
大学の就職	On Campus Recruit	×
指導	職業指導	進路指導

なぜ、上記のような日本型が生まれたか？

→企業に余裕があり、多くの人材を抱えることができた。(近年は不況に伴い欧米型に移行する傾向あり)

8 世界の教育制度 配布プリントも参照

8-1 イギリス

三分方式→一本化(総合制中等学校)

①お金持ちの場合

公営学校ではなく、独立学校＝私立学校へと進む。

前期準備校(プレ・プレパラトリ・スクール)

→準備校(プレパラトリ・スクール)

→中等学校(パブリック²⁸・スクール)

→名門大学

②中流階級以下の場合

基本的にすべて公営学校

初等学校(プライマリ・スクール)に通った後、11歳のときに11プラス試験を受ける。

この結果により、そしてだいたい階級によって進む学校が変わってくる。

グラマー・スクール: 上位 20 %、中産階級

テクニカル・スクール: 10 %、技術者

モダン・スクール: 70 %、労働者階級

※大学に行くためにはグラマー・スクールを出ていないといけない。

Oレベル試験(Ordinary): 中等(義務)教育終了試験

Aレベル試験(Advanced): 高等教育卒業資格試験 兼 大学入試資格試験。難しい。

この成績によって行ける大学が決まる。

階級制度が残っており、そのために進学率も高くない。

階級社会

↓

複線型教育制度

子供のうちにどの学校に行くか決められる

学校によっては大学に行けない

↓

階級社会を固定

cf. 単線型: 高専を除いた日本・アメリカ(全員平等・経済や階級の格差なし)→競争加熱

8-2 ドイツ

明らかな複線型教育制度

基礎学校(グルント・シューレ)

↓

ギムナジウム: 全体の 25 %が進学。大学に行ける。エリート。

実科学校(レアル・シューレ): 全体の 25 %が進学。技術者階級。

²⁸ パブリックというのが、実質は私立。プライベートは家庭教師の意味。

基幹学校(ハウプト・シューレ): 全体の半分が進学。労働者階級。

↓

1. 大学へ(ギムナジウムから)

アビトゥーア: 職業資格試験 兼 大学入学資格試験。

簡単。日本のように大学別にやるのではなく州ごとに問題を作る。

必ず望んだ大学には進学できるが人気のある所へ進学するには待機期間を経なくては行けない。

2. 二元制(デュアル・システム: 実科、基幹学校から)

定時制の職業学校に通い**義務職業教育**を受けるのと企業内職業訓練を並行して行う。

8-3 フランス

やはり複線型。ただ大学のところでちょっと違いがある。

小学校

↓

コレージュ(中学校)

↓

リセ(普通高校)

職業高校

1. リセから進学

バカロレア: 大学入学資格試験。20 科目中 10 科目を受けなければいけない。国が作成。合格率60%

↓

大学

グランド・ゼコール: 大学よりもエリート。高級官僚や高級技術者を育てるための機関。

2. 職業高校

↓

BEP(職業教育修了証)

8-4 英独仏と日米の教育制度の比較

※社会形態と教育制度は相互に作用している

	英・独・仏	日・米
社会形態	階級社会	流動社会
教育制度	複線型教育	単線型教育
職業教育	○	△または×
共通試験	資格試験	競争試験
大学ステータス	必ずしも社会的成功には繋がらない。	社会的成功に繋がりが易い
進学競争	進学競争は過熱しない	進学競争が過熱しやすい

9 大学入試

9-1 歴史

	1940	50	60	70	80	90	2000年
共通テスト	47	54	63	68	79	90	
	進学適正試験		能研テスト		共通1次試験		センター試験
グループビング	47				79	87	
	一期校(旧帝大)				受験機会の複数化		
	二期校(新しい大学)						

※ 1979～1987の間は国立大学を1回しか受けられなかった。

※ 進学適正試験は、SAT(後述)を模倣したもの。

9-2 共通一次試験の目的

①一元的尺度(成績のみで決まる)→**尺度多元化**による総合選抜＝アメリカモデル

～アメリカの入試～

a.過去について…内申書(ボランティア・スポーツ)

GPA(Grade Point Average):高校時代の5段階評価の平均点

b.現在について…学力テスト **ACH**(ACHievement)

c.将来の可能性…進学適性検査 **SAT**(Scholastic Aptitude Test)

ACH・SATともに大学各自が行うのではなく、大学の連合体が行う共通テスト

その他特徴

- ・ 集団の異質性(人種・貧富の差なくとるようにする)
- ・ **AO**(Admission Office):1年かけて、全国から優秀な人材を集めてくる。大学の先生は入試にノータッチ

共通テスト
アメリカ SAT、ACH
イギリス Aレベル試験
フランス バカロレア
ドイツ アヒトウアー

日本の入試:一元的尺度・競争試験→一発学力勝負、一日で決める→受験加熱

アメリカの入試:多元的尺度・資格試験→受験そんなに過熱せず

<日本の場合>

79年の文部省の指導

→ { 共通一次……基礎学力……画一化 → 成功
個別二次……面接、小論文……多様化 → 失敗

例)宮城教育大…太鼓に合わせて躍らせるという二次試験

→全国から学力の低い学生が一発逆転を狙って集まる→偏差値急低下

→5年後に普通のペーパーテストに戻る

⇒結局二次試験も学力試験となってしまった

②一期校と二期校の格差解消

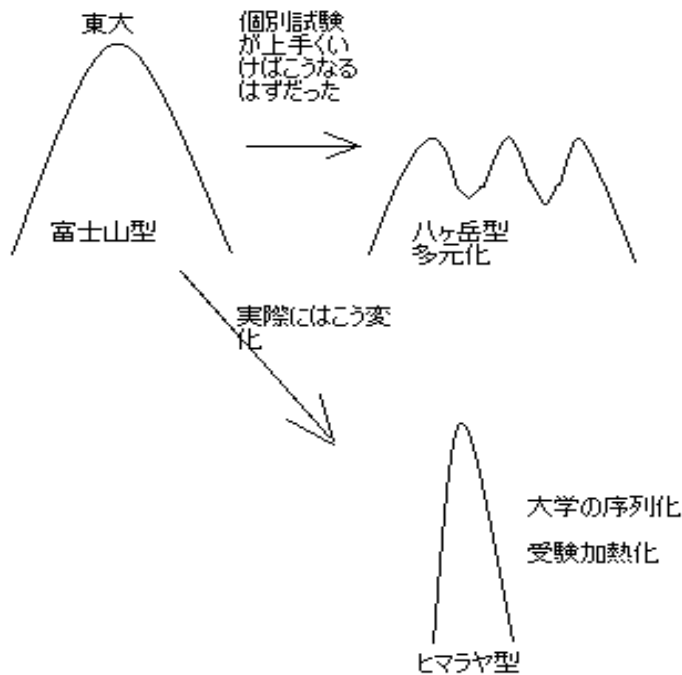
一期校…東大、一橋、東工など 合格発表は3月初旬

二期校…横国など 合格発表は3月下旬

二期校コンプレックス…学生の定着率悪い、仮面浪人(→一期校を受験)

横国の出身者が多く連合赤軍に関わる

←横国の学長は国会に呼ばれてこの原因として二期校コンプレックスを挙げた。



9-3 共通一次試験の結果

共通一次

結果は非公開→大学の序列化を防ぐ為→しかし、高校から公開を求める強い声

⇒公開と非公開のいわば中間をとり、自己採点方式

⇒受験産業が入り込み、実際は公開に近い状況に

⇒大学の序列化が進む

⇒①受験生の国公立離れ(特に理系離れ)→私立

②受験産業の大企業化(受験生にとって不可欠に)

③偏差値の意味合いの変化(集団内の位置→受験生の価値→大学の価値)

国立大学の逆襲

・ アラカルト方式(センター試験)(90年から好きなだけの教科数受けてよい)

・ 受験機会の複数化

87年 連続方式(地理的にA日程・B日程を分ける) →京大は東大に優秀な学生を取られる

89年 京大、分離分割方式(前期・後期)にする

90年 東大も分離分割方式にする

→全国の大学が前期・後期方式になる。